
時計の針が止まる時

さらさら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時計の針が止まる時

【コード】

N3831Z

【作者名】

ちぢぢぢ

【あらすじ】

悲劇が見たい。人々は、彼の気まぐれなその言葉に従い、五つの悲劇を紡ぎ始めた。この物語は、その五つの悲劇を綴った物である。

悲劇を求める彼

「悲劇を見たい。それも、こう、ただ絶望に突き落とすような奴ではなく、突き落とした後に少しの希望が、薄明のように見えるような悲劇が良い。世の中、そんな物はごまんとあるが、それでも見たい」

雲の上から、駄々っ子のように彼がそう叫ぶと、美しい白雲だったそれは突然黒みを帯びて、雨となって地を濡らし、雷となって地を揺るがした。その傍若無人な破壊に、人々は彼に、五つの悲劇を捧げる事を強要された。

人々が、彼に、悲劇を捧げる事を伝えたと、彼は満足げにおよそ雲の上の者とは思えぬような悪辣な笑みを浮かべた。すると、雲はたちまち霧消し、降った雨は川を一本作って海へ流れ込み、雷は姿を消して元の静寂を返した。

彼は、人と同じようにある、五つの指の、親指を除いた四本の指を見せ、それから元と同じように人々に見えない場所へと消えていった。

人々は、そうして、四千年の間に五つの悲劇を、それも彼の望む形で作らねばならなくなった。これは、捧げられた五つの悲劇を綴った、物語である。

高校生活・1（前書き）

――あらすじ――

いつでも帽子を被っていて、ちよつぴりお茶目だけど、几帳面であまり目立たない女の子、智子。都会から遠く離れた田舎に暮らす智子は、古ぼけた木造校舎の高校に通っていた。腐れ縁とも呼ぶべき愛する友人、雄樹とじゃれ合う日々、半身で満足しながら半身では強い不足感を得ていた智子の耳に、転校生の噂が飛び込んで来た。一風変わった転校生は、強く智子の心を惹きつけて……？

「寒いつ！」

四方を山に囲まれながら、どこやらか吹き込んでくる霜月の寒風にお気に入りの青くて深い帽子を飛ばされないうよう、智子は帽子の頂点を強く押さえながら、まるで誰かに文句を言うように、およそ女性らしい気品とは程遠い様、つまりは唾を飛ばしながら、そう叫んだ。

「寒い、さむさむ、寒いよ、雄樹い……！」

「そんなする程寒いかあ？　こんなぐらいでマフラーなんてしてるの、お前ぐらいだぞ？」

隣を歩く雄樹は、寒気対策に躍起になって重装備な智子に比べると、幾分か軽い服装だったが、それでもずっと風に当たり続けた手の平は、その寒さに耐え切れず、両手をすり合わせて暖を取っていた。山に囲まれた地域らしく、この辺りは太陽が昇るのが遅く、朝方は特に冷える。まだ、太陽が山にその全身を持ち上げられているような時間だから、実気温も体感気温も低く、山の向こうから来た人々なら、寒くて震えるような気温だった。

「ま、俺なら、まだ半袖半ズボンもいけるだろうな。絶対やらないけど」

「雄樹、夏服のセンス最悪だもんね」

「違いよ！　そういう意味で言ったんじゃないっての」

その十一月の寒空の中を、良く言えば雄大な、悪く言えばただっ広い田んぼ道をぐり抜けて、二人はこの片田舎へたった一つだけ建てられた、全校生徒数十五名の高等学校へと、東へ東へ歩みを進めていた。二人で登校するのは、小学校の頃から変わらない、いつもの事だ。

「ただほら、子供は風の子って言うだろ？」

「大人は火の子、とも言っね。雄樹はいつまでも子供って事かあ」

二人の足下は、舗装すらされてはいない。周りの背の低い木々と、真つ直ぐに伸びた土の一本線だけが、ここが道である事を示しているのだった。

ひらり、と、歓談を続ける二人の前に、二、三枚の濃緑の葉が舞い落ちてきた。智子は特に興味を抱かず、そのまま歩き続けようとしたが、隣で雄樹が興味深そうな目でその葉っぱを拾い上げて立ち止まったので、仕方無く振り返って雄樹がじつと眺めているその葉っぱを見た。

「何、この葉っぱ？」

「ヒイラギ……かな。ほら、尖つてて、反りがあるだろ？」

雄樹はそう言いながら、今度は葉から目を外して、辺り三百六十度全体を見渡すように、ぐるぐると首を回し辺りの景色を見やった。「でも、おかしいな。ヒイラギなんて、この辺りにはない筈なんだが」

「風で飛ばされて来たんじゃない？」

「葉っぱは上から落ちてきたんだぞ？ 風に乗ったにしても、無理があるだろ」

雄樹は、まるで自らを探偵だと思い込んでいるかのように、あくどに右手の指をあてて、じつと考え始めた。元から、葉っぱの由来などに興味のない智子は、その間中ずつと、近くの木を観察したり、雨が降る気配のない空をボーッと見詰めたりしていたが、ついに耐え切れなくなつて、

「雄樹いー……寒いよおー……」

と、彼の右袖を引つ張つた。

「ん、ああ、ごめんごめん。どうでもいい事に時間食つちまったな」
うたたねしていた所を誰かに揺さぶられたように、ハツとした表情を見せながら、雄樹は葉っぱを空に投げ捨てて、さっきよりも少し高くなつた太陽へ向かつてまた足を踏み出した。

「ほんとだよー。今度、缶ジュース一本おごりね」

「それは断る」

智子が、不満を示すように、自分の左肩に掛けているハンドバッグを、大袈裟に叩いた。雲ひとつない空、影ひとつない道。これが二人の、”いつもの登校道”だった。

高等学校、とは言うものの、田舎にポツンと建てられた全校生徒十五名のこの私立高には、先生も校長先生を含めても三人しかおらず、授業などでは、二人の所属する第二学年に生徒が四名しか居ない為に、全員が顔見知りで仲が良いという、非常に和気あいあいとした活気のある場所だ。

その活気ある扉を、チャイム代わりのシンバルの音と共に開いて、二人は息を切らしながらそれぞれの椅子に座った。

「まーたギリギリね。あんた達、ちよつとは時間を考えて歩いたら？」

教壇から身を乗り出して、若い女性の、眼鏡を掛けた佐藤先生が、まるで友人でも見るような親しみのある目で、二人に言った。

「今日は智樹が……」

「あーはいはい。そんな言い訳は、毎日聞いているわよ。仲睦まじいのは分かったから、とりあえずシンバルが鳴る前に座ってなさい」

佐藤先生は、そう言うてにっこりを微笑むと、一時間目の授業である現代文のテキストを開き、非常に見易い字で、黒板に大きく「二十分間・黙読」と書いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3831z/>

時計の針が止まる時

2011年12月14日20時53分発行